日　本　科　学　史　学　会

科学史学校

2017 年度（第 30 期）

第 1 回　2017 年 4 月 22 日（土）

新しいシーボルト像

——英雄史観，リロケーション，史料の活用法

塚原東吾（神戸大学）

第 2 回　2017 年 6 月 24 日（土）

ナウマン研究から見えてきたこと

矢島道子（早稲田大学）

第 3 回　2017 年 8 月 26 日（土）

植民地朝鮮における水害研究

宮川卓也（日本学術振興会特別研究員）

第 4 回　2017 年 10 月 28 日（土）

日本における原爆と放射能のイメージ

中尾麻伊香（立命館大学）

第 5 回　2017 年 12 月 2 日（土）

日本の不妊医療と産婦人科医学者

由井秀樹（日本学術振興会特別研究員）

第 6 回　2018 年 2 月 24 日（土）

内部環境概念から ホメオスタシス概念への展開

——ベルナール，ホールデン，ヘンダーソン，そしてキャノン

小宮山陽子（東京女子医科大学）

背景の図版：
Siebold, P. F. von: *Flora Japonica.*
Lugduni Batavorum, 1835-70. 3 v.

● 科学史学校とは……

科学や技術の歴史についてのご関心にお応えする一般向け講演会です。事前の申し込みや参加費は不要ですので，どうぞお気軽にご来聴ください。

● 開催時刻と場所

各回とも 14:00〜16:00（開場 13:30）
日本大学理工学部
　1 号館 7 階 171 教室（第 1・2・4・6 回）
　5 号館 2 階 524 会議室（第 3・5 回）
（JR 中央・総武線「御茶ノ水」駅　下車徒歩 3 分）

● お問い合わせ

日本科学史学会
〒102 - 0093　東京都千代田区平河町 2-13-1 嶋津ビル 202
FAX：03-3239-0545
http://historyofscience.jp/

■ 2017年度（第30期）科学史学校講演要旨

第1回　2017年4月22日（土）

新しいシーボルト像——英雄史観，リロケーション，史料の活用法

塚原東吾（神戸大学）

すでに人口に膾炙されているとも思われるシーボルトについて，科学史の面からの新しい見方を提示する。いわゆる「科学史の英雄」としてのシーボルトという像がいまだに強く残りつつ崩壊していることや，近年カピール・ラジらが提示する「リロケーション」（再配置・新解釈）によるシーボルトの科学的調査活動の再検討，そして史料の科学的・美学的・民俗学（マテリアル・カルチャー）といった領域で用いられる新たな分析手法などについて，最新の話題を紹介していきたい。

第2回　2017年6月24日（土）

ナウマン研究から見えてきたこと

矢島道子（早稲田大学）

エドムント・ナウマン（Edmund Naumann, 1854-1927）は明治8年，お雇い外国人教師としてドイツより来日し，10年間滞日した。東京大学の初代地質学教授であり，地質調査所を創設し，日本の予察地質図を作成し世界に公表した。日本の地質学の父である。しかしながら，ナウマンの業績は時に地に落ち，時に褒めたたえられてきた。なぜだろうか。調査の結果得られた新しい事実もふくめて，ナウマンの毀誉褒貶に日本の地質学の歩みをみていきたい。

第3回　2017年8月26日（土）

植民地朝鮮における水害研究

宮川卓也（日本学術振興会特別研究員）

20世紀初頭に帝国日本の植民地とされた朝鮮は，内地と同じく，毎年水災に悩まされていた。朝鮮総督府は災害対策として河川調査や土木事業を行ったが，それらがどのように進められたのか，植民地科学の観点から考察する。同時に植民地の災害にはどのような特徴があったのか，なぜ朝鮮総督府は災害研究を進めねばならなかったのかなどの問題について考え，近代以降の自然災害のもつ特質について論じる。

第4回　2017年10月28日（土）

日本における原爆と放射能のイメージ

中尾麻伊香（立命館大学）

戦前の日本ではラジウム温泉が流行するなど，放射能は身体によいものと捉えられていた。また戦時中には，原爆を待望するSF小説などが書かれていた。このようなポジティブな放射能・原爆観は，原爆投下の後，どのように変化したのだろうか？　戦前から戦後にかけての日本における原爆と放射能のイメージをたどり，各時代の社会や文化とどのように連動しているかを検討する。

第5回　2017年12月2日（土）

日本の不妊医療と産婦人科医学者

由井秀樹（日本学術振興会特別研究員）

不妊医療は今日，少子化対策の文脈においても重視されている。戦中期の人口増強政策のもとでの不妊医療，戦後まもなくの非配偶者間人工授精（提供精子を用いる人工授精）の導入，1980年代の体外受精 - 胚移植の導入について，産婦人科医学者たちの動向をもとに紹介する。そのうえで1990年代後半以降の生殖補助技術を規制する法制化の動向を含め，現在どのような問題が生じているのか解説する。

第6回　2018年2月24日（土）

内部環境概念からホメオスタシス概念への展開
——ベルナール，ホールデン，ヘンダーソン，そしてキャノン

小宮山陽子（東京女子医科大学）

19世紀の生理学者ベルナールは，生物が有する血液を中心とする液質を「内部環境」と呼び，その恒常性を「生命が自由で独立した存在であることの条件」と唱えた。ベルナールの見解は20世紀の生理学者ホールデンとヘンダーソンに継承され，さらにホメオスタシス概念を提唱したキャノンに受け継がれている。ベルナールに連なる生理学者たちの内部環境概念を分析し，生命現象の探求をめぐる同概念の展開について論じたい。